

鱸重常編『春雨抄』の成立

―「い」の項目の視点から―

三 村 晃 功

はじめに

筆者は近時、古典和歌を例歌（証歌）として収載する、近世に成立した類題和歌集の研究を進めているが、近世期に成立した類題集の種類たるや種々様々で、まさに百花繚乱の様相を呈していると言えようか。そのような多彩を極める近世類題集のなかで、筆者のまだ手を染めていない領域と作品は数限りないが、筆者のこれまでの研究では本格的に取り組む余裕がなく、今後の研究対象に残していた作品群の一つに、鱸重常編『春雨抄』がある。

ちなみに、本抄は歌学書として『和歌大辞典』（昭和六一・三、明治書院）に、

春雨抄 はるさめしふ（うしふん） 『江戸期歌学書』 鱸重常著。寛永一六（1639）年序、明暦八（1637）年版。単語・単句をイロハ順

にならべ、注釈を施し、用例を掲げ、その出典を明記する。引用は、連歌・連句作品にも及び、主に連歌や連句に必要な歌語を編集したものである。

（片岡智子）

のとおり、ごく簡単に紹介されているが、実は、筆者は本抄と一部共通する側面を持つ『類葉倭調集』について、「『類葉倭調集』の成立」（『光華日本文学』第十一号、平成一五・一〇。以下、「前稿」と呼ぶ）なる論考で、一部本抄に触れているのだ。したがって、本抄については、すでに多少の言及もなしとしないが、ともに本抄の完璧な紹介にはほど遠く、本抄の本格的なアプローチなどについては、今後の詳細な研究を待たねばならない現況にあると言えるわけだ。

このようなわけで、筆者はこのたび、鱸重常編『春雨抄』を組上に載せて、本抄がいかなる目的で制作され、従来の類題集と比べてどのような点で異なり、いかなる属性を持つ類題集であるのか等々、詳細に調査・論究したうえで、本抄の近世類題集史における位相にも言及してみたいと企図した次第である。大方の厳しいご批評が得られるならば、幸甚に思う。

二 書誌的概要と内容の問題

さて、鱸重常編『春雨抄』の伝本については、『私撰集伝本書目』（昭和五〇・一一、明治書院）によれば、

254 春雨抄 鱸重常

春雨抄 一〇 明暦三写 秋田県

春雨抄 四 写 高松宮寛永一六年林道春序

のごとく、写本で伝存する由であるが、管見によれば、本抄は刈谷市中央図書館・陽明文庫などに版本として伝存しているので、本稿では、刈谷市中央図書館に伝存する版本を底本に採用して、以下、論述していきたいと思う。なお、筆者は当該本を直接閲覧していないので、国文学研究資料館から提供された紙焼き写真を活用したことを断つ

ておきたい。

そこで、まずは、刈谷市中央図書館蔵の『春雨抄』の書誌的概要に言及しておこう。

国文学研究資料館蔵のマイクロ・フィルム番号 30124511 D2222

所蔵者 刈谷市中央図書館 蔵 1804/7/2甲五

編著者 鱸重常編

体裁 大本（縦二七・五センチ、横一九・九センチ）七冊（第一冊Ⅱ巻一・二、第二冊Ⅱ巻三、第三冊Ⅱ巻四・

五、第四冊Ⅱ六、第五冊Ⅱ巻七、第六冊Ⅱ巻八・九、第七冊Ⅱ巻十）版本 袋綴じ

題簽 春雨抄 第一（Ⅱ第十）

内題 春雨抄 第一（Ⅱ第十）

目録題 春雨抄

匡郭 なし

各半葉 十二行（和歌一行書き、目録十一行）

総丁数 千九十丁（第一冊・百七十四丁、第二冊・百四十四丁、第三冊・百七十九丁、第四冊・百四十五丁、

第五冊・百三十六丁、第六冊・二百九十五丁、第七冊・八十二丁）

総項目 三千三百二十三項目（第一巻へいゝは・三百五十項目、第二巻へいゝと・百八十一項目、第三巻へち

ゝか・四百二十八項目、第四巻へよゝそ・二百五十一項目、第五巻へつゝな・二百三十六項目、

第六巻へらゝく・四百二十六項目、第七巻へやゝて・四百十七項目、第八巻へあゝき・四百二十三

項目、第九巻へゆゝし・二百八十九項目、第十巻へゑゝす・三百二十二項目）

柱刻 なし

序 寛永十六年四月中浣 羅山子道春撰

跋 なし

刊 記 明暦三年五月吉日／長谷川市郎兵衛刊行

以上の整理によつて、本抄が通常の類題集とはやや異なつて、歌字書の側面を多分に持つ歌書であるといふものの、かなり大規模な内容を備えた類題集であることは容易に想像されようが、その規模については、総項目数が三千三百二十三項目で、そのうち、第一巻（いゝは）・三百五十項目、第二巻（にゝと）・百八十一項目、第三巻（ちゝか）・四百二十八項目、第四巻（よゝそ）・二百五十一項目、第五巻（つゝな）・二百三十六項目、第六巻（らゝく）・四百二十六項目、第七巻（やゝて）・四百十七項目、第八巻（あゝき）・四百二十三項目、第九巻（ゆゝし）・二百八十九項目、第十巻（ゑゝす）・三百二十二項目である実態から明白であらう。

ところで、本抄を記述内容の視点から概観すると、次のごとおおよそ六種類くらいに分類されるようだ。

- ① 例歌（証歌）のみの掲載
 - ② 連歌のみの掲載
 - ③ 連句のみの掲載
 - ④ 連歌（連句）と例歌（証歌）の両者を掲載
 - ⑤ 例歌（証歌）に解説を付して掲載
 - ⑥ 解説のみの掲載
 - ⑦ 別掲の指示の掲載
- まず、①の事例は、

一 いとなみ

年くれしそのいとなみもわすれてあらぬ様なるいそぎをぞする（傍線引用者、以下同じ）

（玉葉・西行・一八）

うれへなく頼しもなしわがいとなさぬ世はあるにまかせて

（風雅・後伏見〈院〉・一九）

賤のおがをのがわたらひいとなみてすみつむ車ゆき、しるなり

（百首・師光・二〇）

千代ふべき松さへ山を出にけり春をいとなむしづにひかれて

（秋篠）月清集・二二）

のとおりで、「いとなみ」の用語を掲げた後、その用語を含む例歌（不適切な用例も含む）を勅撰集・私撰集・私家集などから採録している。

次に、②の事例は、

一 岩木 イハウバ 鬼ト云り

我身はいきの誰にとはれん いく秋か物おもふらん袖の露

（老葉）

身は賤になしても袖は絶つべし 岩木をみるも秋の夕ぐれ

（新筑波）

のごとくで、まず「岩木」の解説をしたのち、宗祇の連歌集『老葉』と、宗祇ら編の連歌准勅撰集『新筑波集』から当該用語を含む句を掲げている。

次に、③の事例は、

一 いきしに

いつとなく思ふにみだれ暮もしらで 長 いきしにをさへまかせてぞみる 顕

（伊勢千句）

悟の前には生死ナキ心也

のとおりで、『伊勢千句』から「いきしに」の用例を採取している。

次に、④の事例は、

一 いまは

後の世を思ひの玉のを、よはみ いまはの時の心みだるな

雲にけふ花ちり果る峯越て 長 きけば今はの春のかり金 柏

昨日共けふともあらず今はとてもわかれしほどの心まどひに

立田山今はのこ、ろあきかぜにしぐれにいそぐ人の袖かな

今はとてたのもの鴈もうち侘ぬおほる月夜の有明の空

のとおりで、連歌は『新筑波集』と『水無瀬三吟』から、例歌は勅撰集たる『新古今集』から抄出している。

次に、⑤の事例は、

一 いしぶみ 石ぶみ也

石文やけふの細布はつゝにあひみても猶あはぬけさ哉

日本記に、陸奥につばの石ブミト云所あり。田村將軍征夷ノ持弓ノはずにて石ノ面に、日本ノ中央ト書付給を、石文トアリ。石の面五丈計ナルニ、もじは少付たり。其ところを坪ト云。人皆ツボトいへり。(袖中抄)

のとおりで、「いしぶみ」の語意について、『袖中抄』からの記述を抄出している。

次に、⑥の事例は、

一 いみさす 神事に、其氏子など、いみにさゝる、事あり。門に竹を立、しでを付てさすも有。卯月のいみにさしこめて、とあり。

のごとくで、典拠を示さないで、当該用語の解説にのみ及んでいる。

最後に、⑦の事例は、

一 いゑばと 鳩ノ所

のとおりで、「いえばと」の説明は「鳩」の項を参照するようにと注記している。しかし、「鳩」の項目はなく「鳩ふく 鳩吹」が項目立てされてはいるが、「いえばと」には言及がない。

以上、本抄の記述内容を概観してみたが、その内容は院政期以降に成立をみた『隆源口伝』、『綺語抄』（藤原仲実）、『和歌童蒙抄』（藤原範兼）、『奥義抄』（藤原清輔）、『和歌初学抄』（同）、『袖中抄』（顕昭）などの系列下に連接する歌学書の側面を多分に持っていると推察されるであろうが、この問題は後述する。

ところで、本抄の性格を類題集の視点からみると、いかなる分類が可能になろうか。この問題については、筆者は近時、「類題和歌集概観——古典和歌を中心とする——」（『夫木和歌抄 編纂と享受』平成二〇・三、風間書房）なる論考で、類題集の分類を試み、

（一） 六帖題に分類される類題集

（二） 題を細分化した系列に分類される類題集

a 六帖題の系列下にある類題集

b 勅撰和歌集の系列下にある類題集

ア 特定の私家集・私撰集（単数）による類題集

イ 勅撰集・私家集・私撰集（複数）などによる類題集

ウ 特定の流派による類題集

エ 特定の地域の歌人の詠による類題集

オ 歌題を欠く類題集

カ その他

（三） 特殊な題に分類される類題集

- a 名所（歌枕）題による類題集
- b 中国の故事などによる類題集
- c 仮名句題・詞書などによる類題集
- d 用語例による類題集
- e 物名などによる類題集
- f その他

のごとく分類したうえ、この種別による分類を、さらに撰集段階の視点から、

I 一次的撰集（真名題、仮名題・詞書など）

II 二次的撰集（真名題、仮名題・詞書など）

のごとく分類したのであった。

この筆者の提出した類題集の分類試案によれば、本抄は「I 一次的撰集」のうち、「(三) 特殊な題に分類される類題集」のなかの「d 用語例による類題集」に該当することになるか。そこで、本抄の内実について、節を改めて、歌語（歌題）の視点から、アプローチしてゆきたいと思う。

三 歌題（歌語）の問題

さて、本抄の内容については、前節の冒頭で言及したとおりだが、そのうち、第一巻がいははの項目を三百五十項目にわたって、各種の視点から各項目の解説に及んでいる。そこで、この節では、「い」の二百九項目がいかなる歌語（歌題）であるのか、歌題（歌語）の視点から検討を加えてみよう。次に掲げる歌語は「い」の項目のすべ

てである。

1 いろ 2 いさゝめ 3 いざなみ 4 いとなみ 5 いやとしのは 6 いやよく 7 いやまし 8 いやたか山
 9 いざみ山 10 いさむ 11 いつゝのをきて同さはり 12 いほへの雲 13 いづてぶね 14 いすゞ河 15 いほしろ田
 16 いく田 17 いく野 18 いきの松原 19 いく薬 20 いのち 21 いき 22 いかまほし 23 いきしに 24 いくさ
 25 いむしろ 26 いむ 27 いみさす 28 いたむ 29 いたるいたく 30 いたづら 31 いづら 32 いまはいつとは
 まさらに 34 いましは 35 いまき 36 いまこん 37 いま宮 38 いっきの宮 39 ゐかき 40 いせの神伊勢嶋いせのう
 み伊勢の浜狭い勢のあま 41 いそしの御井 42 いせわたる 43 いはほいはきりとをし行水いほそぐ水いほ戸いは屋いはかけ 44 い
 はばし 45 いはでのさと 46 いはせ 47 いはれ野 48 いはくら山 49 いは坂山 50 いはき山 51 いは田 52 い
 はかきぬま 53 いは代 54 いはた山 55 岩木 56 いはもとざくら・いはねざぐらいはつゝじ 57 いし神 58 いはふ
 ね 59 いはし水(山城) 60 同名(近江) 61 いは井の水 62 石いしはしる 63 いしのおまし 64 いしぶみ 65 石山
 66 いし川 67 いしぶし 68 いろくづ 69 市女 70 いしに成人 71 いしの火 72 いしの竹 73 いしずへ 74 家
 の風 75 いゑづと 76 いゑをいづる 77 いゑざくら 78 いゑばと 79 いほ 80 いらか 81 いた屋いたびさし・いた戸・
 いたま 82 いた井いた井(たひ物也) 83 板田橋 84 板倉山 85 いたどり 86 いとすゝき 87 いとやなぎ 88 いとゆふ
 89 いと 90 いとざくら 91 糸水 92 いと竹 93 いとなみ 94 いたもかしこしとせて・いとはや・いとなき 95 いと
 ふ 96 幾 97 いくら 98 いさ 99 いかばかり 100 いなせ(音信) 101 いなや・いや 102 いなこや 103 いなおほ
 せ鳥 104 稲 105 いなくきいなむしろ 106 いなづま 107 いなびかりいなばの雲・いなばの衣いながち 108 いなぶね 109 いなり山
 いなりまつり 110 いなば山いなばの嶺 111 いよのゆ 112 いにやしにけん 113 いにし年 114 いにしへ 115 いそのかみ 116
 いそ 117 いそまのうら 118 いさり 119 いかり 120 いなさほそえいなさ(遠江) 121 いらこ 122 いかゞさき 123 いちし
 の浦 124 逸師 125 いかごのうみ 126 いづのうみ 127 いさゝ 128 いけ 129 いけのいひ 130 いづみ 131 いづみ河

132 いづみの 柚 133 いかだ 134 いさや川 135 いつぬき河 136 いさら井 137 いけるをはなつ 138 いさごよき 139 い
 さけき 140 いさよふいさよふ・いざよふ(不知夜歴也・いざよひ 少かはる) 141 いざなふ 142 いぬる 143 いぬ(犬) 144 いぬざ
 くら 145 いぬる 146 いづこ・いづく・いづち・いづかた 147 いつしか 148 いかにいかにいかゞ・いかん・いかさま・いかば
 かり・いかで 149 いらへ 150 いはぬはいふにまさる 151 いへばえに 152 いひしらぬ 153 いとけなきいはけなき 154 いぎ
 たなし 155 いをやすく 156 いぶせき 157 いかる 158 いどむ 159 いたはり 160 いたづき 161 いきの緒 162 いきす
 だま 163 いのり 164 いもゐ 165 いもせいもがり 166 いもせ川 167 いもせ山 168 いも山 169 いこま山尾上・嵩嶺 170 い
 まき山嶺 171 いさみ山 172 いたはた坂 173 いはくに山 174 いづのお山 175 いぶき山 176 いはみ湯 177 いはせ野
 178 いるまの里 179 い水川 180 いかほね沼 181 いすだれ 182 いみじく 183 いはふ 184 いちはや(家強・急逸・
 逸早) 185 いちじるき 186 いちゐ 187 いはとがしは 188 いつまで草 189 いたゞく 190 いやしき 191 いつはり
 192 いなゝく 193 いかづち 194 いりあひ 195 いくくしみ 196 いかるこ 197 いざり 198 いさをし 199 いろたへの上
 200 いさゝか 201 いぐし 202 いちみの雨 203 いろいろ月 204 いもとうたふ・いせ人うたふ妹が門うたふ・石川うたふ
 205 いふならく 206 いなみ野 207 石戸山 208 いはし水 209 いきのまつばら

以上、「い」の項目に収載される二百九の歌語(歌題)をすべて列挙したが、この整理によって、本抄がいかに
 多くの項目を収載しているかが窺知されるであらう。ちなみに、この本抄に収録の歌語(歌題)を、本抄よりも
 二十年後の延宝五年(一六七七)に版行された同種の歌学書(類題集)『類葉倭調集』の「い」の項目(七十七項目)
 と比較してみると、本抄と重複する項目は、4・11・20・21・24・26・30・39・43・44・58・62・67・68・71・
 74・77・82・85・88・89・93・95・103・104・106・108・109・114・116・118・124・127・128・130・133・140・141・143・
 156・160・163・164・183・186・188・191・193・196・201の、都合五十八項目のとおりである。

この点から、本抄がいかに独自の歌語(歌題)を多量に収載しているかが窺知され、そこに本抄の属性を認める

ことができよう。ちなみに、この問題については、前稿で、『類葉倭調集』の「に」の項目（三十項目）と「を」の項目（六十一項目）について同様の比較を試み、前者では十項目が、後者では十三項目が各々、重複している実態を明らかにしているのも参考になるであろう。

以上から、本抄の作歌にかかわる歌語（歌題）の収録状況をみると、本抄は基本的に、年中行事などの儀式・行事にかかわる用語、歌ことば、歌題（真名題）、仮名句題などを中心として収載する『類葉倭調集』の性格と共通する側面を持つようだが、就中、本抄には8・9・14・18・37・38などに見られるように、歌枕に言及した項目が数多指摘され、この点は本抄の属性として認められるのではなからうか。

四 収載歌の問題——出典と詠歌作者

それでは、以上説明したごとき属性をもつ『春雨抄』の歌題（歌語）には、いかなる例歌（証歌）が付せられているのであろうか。本節ではこの問題について検討しようと思うが、幸甚なことに、本抄には、例歌（証歌）のほとんどに集付（出典注記）と作者表記が認められるので、まずは、本抄の出典調査を試みることで、本抄の性格のおおよそを明らかにしたいと思う。

そこで、本抄の「い」の項目に例歌（証歌）として収載されている五百七十七首の出典調査を試みると、残念なことに、本抄には現時点で典拠を探索しえない詠歌も少なく、出典未詳の例歌（証歌）は以下のとおり、十二首を数えるのである。

- 1 うきの中に嬉しき事を夢見るは悪に善はいやまさりけり
（いやまし・二九）
- 2 衣をば竹のさえだにかけをきて虎に身なげし人もいづらは
（いのち・七〇）

- 3 引きよせてむすべしはの庵りにてとくればもとの野原なりけり (いは・いほり・同《慈鎮》・二四二)
- 4 君故に横の板戸の明暮に忍びくねをのみぞなく (いた屋・二四四)
- 5 我妻とたのめしるともいたどりの葉びろに成ぬ袋たへ君 (いたどり・虎杖・蕨の類也・二五八)
- 6 日をへつゝすがくさゝがに一筋にいとなみくらす果をしらばや (いとなみ・新拾遺《集》・二七四)
- 7 いくばくの年はふる野の鉾杉の枝の盛の神さびぬらん (いく・幾・二九〇)
- 8 よのつねのもみぢとやみる往古の美にひける庭のにしきを (いにしへ・往古・同《秋篠月清集》・三三六)
- 9 往古もかくやは人のまどひけんわがまだしらぬ東雲の道 (同・同・三三七)
- 10 いにしへはをどろかされし鳥の声を老の證に待てこそきけ (同・藻塩《草》・実治・三三九)
- 11 それとだにしらばいひても見まくほしいときなき子をいかにいさめん (いとけなき・幼・四七四)
- 12 いやしきも大君が代をはじめにてまなべあさかのやまとことのは (いやしき・藻塩《草》・五四四)
- この1～12の十首をみると、集付(出典注記)や作者表記が認められる場合もある。たとえば、3の詠には「同《慈鎮》」の作者表記が、6の詠には「新拾遺《集》」、8・9の詠には「同《秋篠月清集》」、12の詠には「藻塩《草》」の集付が、10の詠には「藻塩《草》」と「実治」の集付および作者表記が掲げられているのだが、何故かその理由については分明ではないが、これらの注記(表記)はいずれの場合も誤注であるわけだ。よって、「い」の項目に収載される五百七十七首から、この出典未詳の十二首を減じた五百六十五首の出典(原拠資料)について、五首以上の収載が認められる典拠を、整理、一覧すると、次頁の(表1)のごとくなる。なお、(表1)には、本抄に出典注記などを欠く例歌(証歌)や、誤注が施されている場合などについては、筆者の調査によって補足や訂正を行なった結果であることを断っておきたい。

(表1) 「い」の項目に収載される五首以上の詠歌の出典一覧表

作 品 名		歌 数	作 品 名		歌 数	作 品 名		歌 数
1	夫木和歌抄	五八首	11	後撰和歌集	一九首	20	新続古今和歌集	八首
2	玉葉和歌集	五〇首	11	続千載和歌集	一九首	22	古今和歌六帖	七首
3	拾遺和歌集	三七首	13	秋篠月清集	一七首	22	大和物語	七首
4	新古今和歌集	三五首	14	源氏物語	一五首	22	新拾遺和歌集	七首
5	千載和歌集	二八首	15	後拾遺和歌集	一四首	24	袖中抄	五首
6	続古今和歌集	二七首	16	新勅撰和歌集	一三首	24	八雲御抄	五首
7	古今和歌集	二四首	17	新後拾遺和歌集	一一首	24	続拾遺和歌集	五首
8	万葉集	一二首	17	歌枕名寄	一一首	24	新後撰和歌集	五首
8	風雅和歌集	一二首	19	詞花和歌集	九首	24	新千載和歌集	五首
10	金葉和歌集	二〇首	20	続後拾遺和歌集	八首	合 計		五一三首

この(表1)によれば、「い」の項目において出典が明確な例歌(証歌)五百六十五首のうち、九十・九パーセントが五首以上を収載する作品(原拠資料)で占められている実態が知られよう。そこで、(表1)に掲載の作品(原拠資料)を概観してみると、意外にその種別が少ないことに驚かされるので、ここで本抄の出典作品をその種別(ジャンル)ごとに整理して、本抄の内容的な属性を探る手掛りにしてみよう。

その第一は、本抄の出典(原拠資料)のうち、第一位を占める作品を持つ私撰集・類題集のジャンルであろう。それらを時系列の視点で示すならば、現存する最古の歌集で、長歌・短歌・旋頭歌などの歌体のもとに雄渾な詠歌約四千五百首を取めた、奈良時代に成立の私撰集たる『万葉集』以下、作歌の手引き書として多量の古歌を収録した平安時代に成立の類題集たる『古今和歌六帖』、歌題別に上代から当代までの一万七千首強の詠歌を集大成して『玉

『葉集』の撰集資料ともなった、藤原長清編というよりも冷泉為相編と考慮される私撰集たる『夫木抄』、歌枕および例歌を国別に掲げ、『続拾遺集』までの勅撰集のほか、私撰集・定数歌・歌学書などから類別し、概要は鎌倉末期の成立であろうが、江戸時代に版本として上梓された『歌枕名寄』（澄月編か）などが該当しようが、要するに、このジャンルは上代から近世にまで及んでいる。

その第二は、一国の帝王が文化事業として詩歌集の編纂を臣下に命じた結果誕生した、第二十一編の勅撰和歌集（総称して『二十一代集』と呼ぶ）からの採録が圧倒的多数認められ、本抄の主要な撰集源となっている。ちなみに、第十番めの『続後撰集』は四首の採録で（表1）には未掲載だが、本抄はすべての勅撰集を選歌対象にしている。すなわち、平安時代では第一番めの『古今集』から『千載集』までが、鎌倉時代では第八番めの『新古今集』から第十六番めの『続後拾遺集』までが、南北朝時代では第十七番めの『風雅集』から第二十番めの『新後拾遺集』までが、室町時代では第二十一番めの『新続古今集』が各々、その収載数にはかなりの落差が指摘されるものの、採録対象では一様に扱われている実態が知られよう。

その第三は、新古今時代の藤原良経の私家集たる『秋篠月清集』が第十三位に位置づけられ、（表1）では唯一の私家集からの選歌対象になっているのは特筆されようか。その点、同時代の歌人の詠歌が『新古今集』から採られている実態と比較するとき、本抄の属性として指摘することは許されるであろう。

その第四は、平安時代に成立の作り物語である『源氏物語』と『大和物語』の詠歌が採録対象になっていることであろう。ちなみに、（表1）には未掲載だが『伊勢物語』からも三首採歌されているのは、本抄の編者の和歌観を反映していると思われるであろう。

最後に、第五の特徴として歌学書および歌論書を採録対象にしていることが指摘されよう。まず、顕昭著の『袖中抄』は守覚法親王に奉った歌学書で、文治二・三年（一一八六・八七）ごろの成立。『万葉集』から『堀河百首』

時代ごろまでの難解な語句三百ほどを採りあげて自説を述べた、言わば六条家歌学を継承発展させた顕昭の注釈学の集大成と目される歌学書。一方、順徳院著『八雲御抄』は、承久の乱後ほぼ成ったらしい草稿本と、佐渡遷幸後、院が鋭意加筆訂正して藤原定家へ送った精選本とが伝存するが、内容は従来の諸歌学書の所説を参看して、組織的に集大成された歌論書で、和歌史・歌論史研究上貴重な資料を提供している。要するに、片や院政期ごろの注目すべき歌学書、片や中世前期の貴重な歌論書というわけで、本抄の注釈内容を示唆する出典源と言えるであろう。

以上、出典面から把握された本抄の「い」の項目の属性について略述したが、以下には参考までに、四首以下の出典作品を掲げておこう。

(四首収載作品) 新撰和歌六帖・続後撰和歌集

(二編)

(三首収載作品) 伊勢物語・千五百番歌合

(二編)

(二首収載作品) 久安百首・堀河百首・色葉和難集・年中行事歌合・六百番歌合

(五編)

(一首収載作品) 為家千首・為家集・遠島歌合・河海抄・寛喜女御入内和歌・季経集・顕輔集・源氏釈・現存和

歌六帖・古事記・後京極殿御自歌合・治承三十六人歌合・拾遺愚草・拾玉集・俊頼髄腦・深窓秘抄・新撰和歌・

正治二年百首・草庵集・蔵玉集・待賢門院堀河集・鷹三百首・道助法親王五十首・日本書紀・壬二集・六花

集注・和歌口伝・和歌色葉・和泉式部統集

(二九編)

本抄の特徴は出典(原拠資料)の視点からいえば、おおそ以上のごとく要約されようが、それでは、本抄の出典面から整理された以上の特徴は、視点を代えて、詠歌作者の視点から見たとき、はたして同様の傾向を示しているのだろうか。次に、本抄を詠歌作者の視点から言及してみようと思う。

さて、本抄の「い」の項目に収載される五百七十七首の例歌(証歌)の詠歌作者には、どのような歌人が認めら

ちなみに、(表2)のうち、「読人不知」は勅撰集に見出される作者表記で、周知のとおりだが、「作者付記」は『万葉集』『古今和歌六帖』『夫木抄』『歌枕名寄』などの私撰集・類題集、『袖中抄』『俊頼髓脳』『和歌口伝』『色葉和難集』『八雲御抄』などの歌学・歌論書、『六花集注』『河海抄』『源氏釈』などの注釈書などに、作者名を欠いた表記、「虚構作者」は『大和物語』に「行平」「俊子」などと固有名詞の表記もまま見られるが、『源氏物語』『伊勢物語』に準じて一括して、そのように仮りに表記したことを、断っておきたい。

この(表2)から、本抄の「い」の項目に三首以上収載される詠歌作者の収載率が五十五・六パーセント、二首以下の詠歌作者のそれが四十四・四である実態が窺知されよう。

そこでこれらの詠歌作者の実態などから、本抄の性格について概観すれば、その第一の特徴は、本抄には、読人不知・作者不記・虚構作者の詠歌が圧倒的多数を占めている実態であろう。このうち、読人不知・作者不記の場合には典拠(出典資料)に掲載されるままを転記しているわけだが、固有名詞を持たない詠歌が多数抄出されている点には、本抄の編者の編纂意図と深くかわる側面を有しているのではなからうか。そこで、本抄に収録される歌語(歌題)の内容を、編者の編纂意図の視点から探索すると、本抄には虚構作者の詠歌がこれまた、数多収載されているが、その実態がこの問題解決に示唆を与えるように愚考される。

たとえば、「い いしのおまし 石御座」の項目をみると、『源氏物語』の注釈書たる『河海抄』が「蜻蛉」巻の引用和歌として「たづねかね今日みつるかなちはやぶるみやまのおくの石のおましを」(家集・二二五、『新編国歌大観』第十巻・同抄・一九〇八)を引用した後、

此哥の心は光俊東わたらひの次ニ、常陸の国鹿嶋ノ社ニ詣侍て、神宮をよび出て、此所にまどかなる石や有、と問侍れば、答曰、委不弁。然シ古き神宮ニ尋侍ラントテ、祢宜を透引。是ヨリ三町ばかり奥ニ、竹ノ中より三尺ホドノ円ナル石ヲ掘出テ、是ナン黄故ヨリアリゲニ子細は不知、トいへり。光俊ノ同コノ明神トて、下り

マシ／＼給ひける時、御神此石ノうへニテ座禪工夫せさせ給ふ。是石ノオマシトイヘリ、トカタル。右其時ノ哥ト云リ。

と、石の御座についての故実、故事来歴を紹介しているのだ。

また、「いなおほせ鳥」の項目は、

さ夜更ていなおほせ鳥の鳴けるは君がた、くとおもひぬる哉

(万・大和物語・山路・三〇二)

此哥所々にて心品かはる。不知。

里とをみくれば野辺にとまるべし稲負鳥に宿やからまし

(夫木〈抄〉・順徳院・三〇二)

『奥儀抄』に、稲負鳥は秋を願する鳥也。秋の穂なみを守は民なり。土民にやどをからん、といはんため也。『藏玉〈集〉』には、野にも山にも秋をふるゝものはいなおほせ鳥なれば、野にとまりなば、いなおほせどりにやどをからむと也。又、有秘書に、伊名男勢妻は四季の中にも秋の色を取分てしれるとあり。

秋の田のあなおほせ鳥のこがればも木葉もよほす露やしるらん
春の田はいなおほせ鳥に住かへてわがこと／＼にうぐひすのなく
我かどにいなおほせ鳥のなくなへに今日吹かぜに鴈はきにけり
(夫木〈抄〉・後) 九条ノ内大臣・三〇四
(百首ノ中・家隆・三〇三)

いなおほせ鳥とは、種々の説ありと云共、たしかなる説なし。秋の田になくよしを詠り。玄鳥のあるにや、
『古今〈集〉』に、『是貞親王家哥合』忠岑詠に

山田守秋のかりほにをく露はいなおほせ鳥の泪なりけり

(三〇六)

此哥は『菅家万葉』にもいれり。『和語抄』には、山田には暁などなく鳥也。『綺語抄』二、稲負鳥は庭た、
き也と有。そのこゝろある哥、

逢事もいなおほせ鳥のをしへずは恋路に人はまどはざらまし

(三〇七)

『古事』記』『万葉集』『奥義抄』ノ秘説、一書ヲ考二、其品々ニよる。

のとおりで、『奥義抄』『蔵玉集』『古今集』『是貞親王家哥合』『和語抄』『綺語證』『古事記』『万葉集』などの各種の歌書を引用して、稲負鳥にまつわる諸説の紹介につとめているのだ。

要するに、この場合は、例歌（証歌）の詠歌作者を明示することよりも、歌語の生まれた謂われ・故事来歴・故実などの説話・伝説・伝承が生じた内容を明示することに、何より重要な意味が担わされているのであって、その点、『源氏物語』では「光源氏」「夕霧」「雲居雁」、『伊勢物語』では「男」「女」、『大和物語』では「右近」「南院の五郎」でも各々、何ら支障を来たさないのである。本抄に読人不知・作者不記・虚構作者の表記が数多指摘されるのは、編者のこのような編纂意図を反映させた痕跡を物語っているのではあるまいか。ちなみに、この点は、『愚問和歌集』の性格と共通する側面を持つようだ（拙稿『「愚問和歌集」の成立（上）・（下）』（上）は『京都光華女子大学研究紀要』第四十七号、平成二一・一二、（下）は『光華日本文学』第十七号、同二一・一〇）参看。

その第二の特徴は、藤原俊成・同定家・同為家などの御子左家の歌人が目立つけれども、これらの歌人のほかに、藤原良経・西行・慈円・藤原家隆・寂蓮・後鳥羽院・式子内親王などの新古今歌人が多数収載されている点であろう。この現象は、現実の日常生活を超越した、虚構的な美の世界を構築させることに精進、邁進した新古今歌人の和歌を創造するという営為が、もしかすると第一の特徴と軌を一にする現象と密接に関連している結果を提示しているのかも知れない。

その第三の特徴は、藤原為家がかなり上位に位置している実態から窺知されるように、新古今時代後の鎌倉時代中期以降の歌人が六条知家・伏見院・源実朝・順徳院・藤原道家・衣笠家良・藤原光俊・同基家・西園寺実兼などのごとく目白押しに並んでいる実態であるう。

その第四の特徴は、柿本人麿と大伴家持などの『万葉集』の歌人と、紀貫之・凡河内躬恒・伊勢・素性などの『古

今集』の歌人が拮抗して収載されている点に窺知されるであろう。

最後に、第五の特徴は、源俊頼・同仲正・藤原隆信・同基俊・同顕輔・同範兼・俊恵・藤原季経などの院政期に活躍した歌人の中に、大江匡房・藤原長能・同高遠・和泉式部などの平安時代中期の『拾遺集』『後拾遺集』初出歌人が伍して並んである実態であろう。

以上、本抄の性格について、収載歌人の視点から検討した結果、その主要部分は読人不知・作者不記・虚構作者などが独占し、その意味するところは、例歌（証歌）の詠歌作者を明示することよりも、歌語の生まれた謂われ・故事来歴・故実などの説話・伝説・伝承が生じた内容を明示することに、何より重要な意味が担わされているのではあるまいか、と推察したが、そのほかの固有名詞で表記されている詠歌作者は、時系列の視点から言えば、『万葉集』から『新統古今集』にいたる著名な勅撰歌人によって占められている実態を明瞭にすることができたように思う。

五 編纂目的と成立時期などの問題

以上、歌題と詠歌作者の視点から、「い」の項目に限定しての検討ではあったが、本抄の基本的な性格などについて概略した。それでは本抄はいかなる目的で編纂されたのであろうか。まずは本抄の編纂目的について検討を加えてみたいと思う。

この問題については幸い、本抄には、江戸時代初期の儒学者で、江戸幕府の儒官を代表する林家の始祖たる林羅山による長文の序が冒頭に掲げられているのが、おおいに参考になろう。なお、序文は漢文で記述されているが、以下には本間洋一氏の助力を得て、書き下し文で引用しておく。

『春雨抄』序

鱸重常拵にて至りて自ら言ひて曰はく、重常、参州の足助の庄、鵜瀬の里自り出で、嘗て東武に來り、刑官の属に列なること年尚し矣。官長更改すと雖も、重常自若也。牒訴倅惚の間、折獄紛綸の暇、倭歌を考へ、倭語を拾ひ、拙き抄する者、殆ど七十余部に及ぶ。出処を標題し、以呂波を用いて、之を次ぐ。永き夜に燭を吹き、三時かき宵に油を焚き、孳々砑々として累歳怠らず。風雨の壁、雪月の窓にて、其の稿を易ふる者数矣。次序漸く成り、聚めて十冊と為し、号して『春雨抄』と曰ふ。密雲靉靄として一雨流樹たれば、則ち諸草木の根茎・枝葉、各大小有り、異別有りと雖も、然して潤ふ所是れ一にして、皆滋り茂るが如し。冀くは、之を見る者、詞花の言葉、是れに由りて其の沢を得、陽和を歌林に發きて、春風を筆苑に得んこと也。只だ是れ重常の寸苗、一滴の微志也。願はくは、一言を乞ひて以て榮と為さんと。

羅山子聞きて之を奇とし、且つ告げて曰はく、夫れ、文字既に母有れば、則ち言語に何ぞ母無からん。人の心は思ひ無すること能はず。既に思ふ所有れば、則ち言ふ所有り。豈に畜人のみならん哉。鳥獸・昆虫、亦た能く鳴き、風水・雷雨・金石・竹木の類と雖も、未だ嘗て相触れて声有らずんばあらず。声有らば、則ち言語を出し、歌詠を發す。本を原ぬるに、其の始めは則ち、天を指して天と曰ひ、地を指して地と曰ひ、人を指して人と曰ふ。誰か然からしむる乎。只だ是れ理の自然なる者也。是れ自り以往、千言萬語平上去入の声、輕重・清濁の響、勝て数ふべからざる也。豈に母の子を生み、子の孫を生むに非ざらん哉。

本朝の古へ、陽神陰神の相共に唱和するは、倭語の母也き。然る後に、言詞生々として愈出で、益繁し。若し一言母為れば、則ち余語は子為り。日の晷、月の暁、水の泉、火の焰、草と叢と、木と梢と、花と萼と、竹と簞と、琴と柱と、舟と舷と、糸と縷と、井と幹と、眉に黛有り、眼に眸有り、口に唇有り、腹に腸有り、手に掌有り、足に趺有るの類、類を以て推して知るべきのみ。

倭語は以呂波に過ぎず。以呂波の変は什佰千萬にして勝て聴くべからざる也。但し、其の間、或は異物同称、一類別呼するあり。孰れをか先にし、孰をか後にせん。或は曉り解し易からざる者有り。即ち是れ詞語の父母也。其の先後する所を尋ね、其の父母為る所以を知らば、則ち復た曉り解すべし。故に曰はく、天地は万物の父母なり、言語も亦た窮まり無きこと天地の如き乎。焉ぞ言を知る人を得て、与に共に之を談らん乎。

重常初め、八橋の杜若の地に産まれ、久しく隅田の都鳥の辺に住み、意を倭語に用ふのみ。此の如きならば則ち、其れ情を獄詞に察するに亦た、如何んぞ哉。酷暑去りて和氣至らば、則ち庶くは此の抄の名に称はんか。司刑の属官の品級異なると雖も、其の志豈に異ならん哉。吁老いたりと雖も、勉めよや。

寛永十六年四月中浣

羅山子道春撰

ちなみに、この序文は、本抄の編者・鱸重常が朱子学の祖で、儒学興隆の基を築いた林羅山（一五八三～一六五七）に序文執筆の依頼を懇願する部分と、それに応えて、林羅山が鱸重常の研鑽の努力を認め、さらなる発展を願って要望する部分の、前後二部から構成されている。このうち、前半部分に本抄の編纂目的が羅山の口を通して語られているが、同時に、編者のことにも言及されているので、まずはこの両者について触れておきたい。なぜなら、現下、鱸重常の事蹟がまったく不分明で、『国書総目録 著者別索引』（昭和五一・一二、岩波書店）にも『春雨抄』の書目を掲げるのみの情報提供でしかないからだ。

さて、本抄の編者・鱸重常は「參州」（三河の国）の「足助の庄、鵜瀬の里」——後半では「八橋の杜若の地に産まれ、久しく隅田の都鳥の辺に住み」とする——の出身であったが、「嘗て東武」（武蔵の国の東部）に出遊して、「刑官」（司法官・裁判官）の「属に列なること年尚し」とあるように、長らく司法関係の職に就いていた。その間、重常は「官長」の「更改」にも「自若」として鋭意、業務の裁判の仕事に精励したが、その多忙な職務の中にも「暇」を得ては、「倭歌を考へ、倭語を拾ひ、抽き抄する」とあるように、和歌に興味・関心を抱いていたためか、「歌語

辞典」のごときものの編纂を企図し、その作業に邁進した結果、参照した歌書類は「殆ど七十余部に及」んだという。そして、漸くにしてその草稿・覚え書の類が集積されて一応、完成を見たのであった。その後、草稿の類を幾度となく改稿、編纂されて、書物の形にまとめられたが、その内容は「倭語」（歌語）の項目（見出し語）を三千三百二十余ほど設定し、それに用例（和歌・連歌・説話など）を出典付きで掲げたうえに、各項目をいろは順に整然と配列して一書として上梓したのであった。書名を『春雨抄』と命名し、版本十冊として刊行されたが、『春雨抄』と命名された理由は、厚い雲が盛んに垂れ込めて樹々に「一雨」をもたらすと、樹々の種別、大小を問わず、一様に「諸草木の根茎、枝葉」を潤し、樹々が「皆滋り茂る」ように、本抄は、これを参看した読者が、収載されている歌語（歌題）を見て、「詞花の詞」（和歌的表現・措辞の示唆など）の恩恵を得た結果、和歌を詠作する際に、「陽和を歌林に発きて」（巧みな発想に基づく歌ごころを喚起して）、「春風を筆苑」（優れた歌風の和歌を多く詠作する結果をもたらす）ことになるという意味を込めて制作されたわけである。

要するに、本抄の編纂目的は、和歌の詠作者が実作をする際に、本抄に収録の優れた豊富な歌語に触発されて、巧みな発想に基づく歌ごころを喚起して、優れた歌風の和歌を多く詠作するべく用意された歌語辞典の供給にあった、と規定しうるのではなからうか。なお、連歌関係の諸事については、ここでは一切省略に従ったことを断っておきたい。

なお、羅山は「歌詠」（和歌なる文芸）の生まれた事情・経緯にも触れて、まずは一般論として、文字の誕生から「言語」の成立に及び、その言語を用いて「鳥獸・昆虫」「風水・雷雨・金石・竹木」はもちろん就中、「人」も各々、「心」に生じる「思ひ」を、表現手段として「既に思ふ所有れば、則ち言ふ所有」るわけだから当然、そこに発生する「声」の存在が浮上してくる、と説き及んだ後、その帰結として「声有らば、則ち言語を出し、歌詠を発する」のが自然の「理」りだと認識して、和歌という文芸の誕生した説明へと進むのである。

そして、この「歌詠」の根源をさかのぼると、「其の始めは則ち、天を指して天と曰ひ、地を指して地と曰ひ、人を指して人と曰ふ」、言語の必然的帰結としての「理の自然なる」展開が認められ、それ「以往」は「千言萬語平上去入の聲、輕重・清濁の響、勝て数ふべからざる」推移、展開があるのだという。

これを受けて、羅山はさらに「本朝」の昔、「陽神陰神の相共に唱和する、倭語の母」の役割が多であった、と主張して、「陽神陰神」（天地の神）が「歌詠」を「唱和」するのは、「倭語」がそれを生み出す原動力になっていた事実があつて、「然る後に、言詞生々として愈出で、益繁し」という状況が生ずる、と説くのだ。となれば、「若し一言母為れば、則ち余語は子為り」という現象が認められるのは当然の帰結であつて、それは「日の晷、月の暁、水の泉、火の焰、草と叢と、木と梢と、花と萼と、竹と簠と、琴と柱と、舟と舷と、糸と縷と、井と幹と、眉と黛有り、眼に眸有り、口に唇有り、腹に腸有り、手に掌有り、足に趺有るの類」がそれを証している、という。

ちなみに、「倭語」は深遠で極まりない、人間の精神の内奥にかかわる機能をもつ点で、「即ち是れ詞語の父母也」ということができ、言うなれば、「天地は万物の父母なり、言語も亦た窮まり無きこと天地の如き」言語の小宇宙を領有する機能をもつ存在だ、と羅山は規定するのだ。ここには、『古今集』の仮名序の冒頭で、和歌の本質と効用、和歌の起源、和歌の発展など、和歌史の展開を開陳する紀貫之の見解と、何かしら通底する林羅山の考え方が窺知され、はなはだ興味深く思われる。

ところで、編者の鱸重常の事蹟についてはさきに、三河の国「足助の庄、鵜瀬の里」の出身で、武藏の国の東部に出生して、「司刑の属官」（司法・裁判官）の業務に就いていたことに言及したが、その生没年は一切分明でないとした。ただし、羅山によるこの序文の執筆時期が「寛永十六年四月中浣」である事実から、寛永十六年（一六三九）四月の時点で、羅山が重常のことを「刑官の属に列なること年尚し」とか、重常に対して「老いたりと雖も、勉めよや」と激励している記述内容は多少の参考にはなるであろう。そこで「年尚し」とか「老いたり」の記述から重

常の生存期間の範囲を憶測すると、この序文が記された寛永十六年は、羅山が五十七歳に相当する事実から考えて、もしこの年時に重常が羅山よりも年長であったとしたら、羅山が誕生した天正十一年（一五八三）よりも以前に、重常の誕生日は想定されるであろう。ちなみに、「老い」の年齢設定は曖昧で、空海の『篆隸万象名義』や『和名抄』（二十卷本）などは「老」の字に「七十」の意を付すが、兼好法師は『徒然草』第七段で、老醜をさらす四十歳を老年期への変換期と設定する一方、『弁慶物語』には「六十余りの老僧」の記述がみられるように、六十余りを「老い」と認識しているのだ。したがって、本抄にみられる「老い」の関係記事から、重常の生没年を想定するのは無理な仕儀と言わざるを得まいが、しかし、敢えて、重常の実人生の大略に言及するならば、鱸重常は天正十年（一五八二）ごろには誕生し、明暦年間（一六五五―五八）ごろには生存していた、と憶測できるのではなからうか。要するに、重常は林羅山と同様に、江戸時代前期を活躍の舞台にしていた人物であった、と想定することは許されるのではあるまいか。

最後に、本抄の成立の問題に言及しておこう。まず、『春雨抄』の成立時期については、すでに言及したように、林羅山が寛永十六年四月中浣に執筆した序文に、本抄に言及した記事が見えるのが唯一の手掛りである。したがって、現時点で本抄の成立時期を想定するとしたら、寛永十六年（一六三九）四月中浣より以前、と想定することができようか。

なお、本抄の刊行年は、刊記に「明暦三年五月吉良日／長谷川市郎兵衛刊行」とある記事から、「明暦三年（一六五七）五月」と想定しえるであろう。

本抄の編纂目的、成立の問題については、おおよそ以上のとおりだが、それでは、本抄は近世類題集のなかで、どのような位相にあるのであろうか。ここでは、いろは順の編纂形式による類題集という視点から、この問題に言及したわけだが、この視点からみてまず想起されるのが、近世期に先行する同種の歌学書たる『色葉和難抄』であ

ろう。この書は鎌倉時代中期以前の成立になる、難解な歌語に証歌、旧説を引用して、その意味を解明した歌学書で、引用書も史書・物語・歌集・歌学書など広範囲に及び、藤原俊成から同定家などの言説も引用している。次いで想起されるのが、時代が相当下るが永正十年（一五一三）ごろ、宗碩によって成った連歌学書『藻塩草』で、これは連歌を詠む者に、古文献から和歌・連歌に用いる雅詞を蒐集して提供する目的で編纂され、引用書も『色葉和難抄』と同様に、広範囲に及び、浩瀚な雅言辞書の性格を備えている。ちなみに、本抄にも『藻塩草』からの引用記事はしばしば見えている。そして、『藻塩草』の後を受けて継ぐのが、天文十九年（一五五〇）ごろまでには成立したと憶測される、清原宣賢編の『詞源略注』で、これは『八雲御抄』『仙源抄』『歌林良材集』など十八部の歌学・歌論書から歌語を抄出して、注解を付したものである。

このように『春雨抄』が成立するまでに同種の歌学書ないし連歌学書がすでに編纂されてはいるのだが、ここで近世期に成立をみた同種の歌学書、類題集の略年譜を掲げてみると、おおよそ次のとおりである。

慶長十一年（一六〇六） 『いろは詞抄』（編者不詳）成立

承応二年（一六五三） 『歌林僕楸』（松永貞徳編）成立

明暦三年（一六五七） 『春雨抄』（鱸重常編）版行

延宝五年（一六七七） 『類葉倭調集』（編者不詳）版行

延宝八年（一六八〇）頃 『いろ波わけ歌録書』（職仁親王編）成立

元禄三年（一六九〇） 『真名草』（河瀬菅雄編）版行

元禄五年（一六九二） 『萩のしをり』（中堀僖庵編）成立

宝永二年（一七〇五）頃 『和歌詞抄』（北村季吟編）成立

宝永七年（一七一〇）頃 『類葉和歌溪雲抄』（中院通茂編）

享保十二年（一七二七）

『和歌詞の抄』（北村季吟編）成立

寛政元年（一七八九）

『和歌虚詞考』（加藤景範編）版行

寛政四年（一七九二）

『詞葉新雅』（富士谷成寿編）版行

寛政七年（一七九五）

『和歌呉竹集』（尾崎雅嘉編）成立

寛政十年（一七九八）頃

『浜萩』（尾崎雅嘉編）成立

文化十二年（一八一五）

『歌辞要解』（伴資規編）版行

文政三年（一八二〇）

『雅語訳解』（鈴木朗編）成立

天保六年（一八三五）

『雅言童諭』（河崎清厚編）成立

ちなみに、このほか、『類字聞書』『玉拾集』『和歌言葉弁故事』『色葉詞寄』など、成立年時や編者は不詳であるが、同種の手引き書が版行されており、近世期には和歌・連歌を詠むための実用書の刊行は、予想外に隆盛の機運をみせていたといつてよからう。

このような同種の歌学書・連歌学書の成立、出版状況のなかに『春雨抄』を置いてみると、本抄は永正十年（一五二二）ごろ成立の宗碩編の連歌学書『藻塩草』の編纂から百四十年余り経過した後の成立ではあるが、近世期における同種の出版物としては、和歌・連歌の両領域からの用例を集成した、ほぼ完璧に近い歌学・連歌学書の性格を備えた歌語辞典ともいふべき書目であったわけだ。ただ、それは十卷千百十丁にも及び、和歌関係の情報以外にも連歌関係の情報を多分に包含した大部な出版物であったために、純粹に題詠歌の詠作を試みる人びとには、多少不具合な側面を感じさせる代物であったことは否めない。したがって、純粹に題詠歌の詠作を試みる人びとの要請に應えるべき、歌題（歌語）に例歌（証歌）を添えた形式の歌語辞典として、『類葉倭詞集』が延宝五年（一六七七）正月に上梓されたのであったが、その後、この種の歌語辞典類が陸続した点については、略年譜に掲げたとおりで

ある。要するに、本抄のいろは順の編纂になる歌語辞典としての近世類題集史における位相は、近世期では、嚆矢の位相にあり、その役割は室町時代後期になる『藻塩草』と近世初期の成立になる『類葉倭詞集』とを連接する、言わば「架橋」の役割を担う点に存した、と認定されるのではなからうか。

なお、本稿では、本抄における連歌の視点からの考察はほとんど留保してきたので、これらの問題は今後の課題と言わねばならないが、ここで連歌の視点からの言及として『俳諧大辞典』（唱和四五・五、明治書院）の記述を紹介して参考に供しようと思う。

春雨抄 はるのあめ 連歌学書。十卷二十冊。鱸重常編。寛永十六年^{三六}四月、林道春序。明暦三年^{五七}五月刊。和歌・連歌の用語をいろは順に挙げて、勅撰集などの歌や連歌の例句を、広く古今の書から引き、必要に応じては簡単な語義を注し、又『奥儀書』等の歌学書を引いて詳しく解説を施している。〔島津〕

六 まとめ

以上、鱸重常編『春雨抄』の成立について、「い」の項目に限定しての考察ではあったが種々様々な問題の検討を、和歌の視点から進めてきたわけだが、ここで本稿で検討した結果得られた一応の結論を、箇条書きにして摘記して示すならば、おおよそ次のとおりである。

(一) 『春雨抄』の伝本には、秋田県立秋田図書館などに写本（明暦三年写）が、刈谷市中央図書館などに版本（明暦三年刊）が各々伝存するが、前者は版本の写しと推察されるので、本稿では後者に属する伝本・刈谷市中図書館所蔵の十卷七冊本を考察対象に採用した。

(二) 本抄は歌語（歌題）について、諸文献から蒐集し、例歌（証歌）と注解を付した歌語辞典と規定しえようが、

その規模は、総項目三千三百二十三項目に及び、その細目は第一卷（いゝは）・三百五十項目・第二卷（にと）・百八十一項目、第三卷（ちゝか）・四百二十八項目、第四卷（よゝそ）・二百五十一項目、第五卷（つゝな）・二百三十六項目、第六卷（らゝく）・四百二十六項目、第七卷（やゝて）・四百十七項目、第八卷（あゝき）・四百二十三項目、第九卷（ゆゝし）・二百八十九項目、第十卷（ゑゝす）・三百二十二項目のとおり。

（三） 本抄の記述内容は、①例歌（証歌）のみの掲載、②連歌のみの掲載、③連句のみの掲載、④連歌（連句）と例歌（証歌）の両者の掲載、⑤例歌（証歌）に注解を付して掲載、⑥注解のみの掲載、⑦別掲の指示の掲載、のおおよそ六種類に分類される。

（四） 本抄を類題集の視点から分類すれば、「一次撰集の、特殊な題による、用語例による類題集」に該当し
 ようか。

（五） 本抄の「い」の項目に収載される歌語（歌題）は二百九項目に及んでいる。

（六） 本抄の「い」の項目には五百七十七首の例歌（証歌）が存するが、そのうち、十二首は典拠未詳なので除外して、残りの五百六十五首について、五首以上の出典資料を調査すると、五百十三首に及ぶ。この数値は典拠の明確な例歌（証歌）のうち、九十・九パーセントに相当する。なお、原拠資料のうち、二桁以上の作品名を示すと『夫木抄』（五八首）、『玉葉集』（五〇首）、『拾遺集』（三七首）、『新古今集』（三五首）、『千載集』（二八首）、『続古今集』（二七首）、『古今集』（二四首）、『万葉集』・『風雅集』（二二首）、『金葉集』（二〇首）、『後撰集』・『続千載集』（一九首）、『秋篠月清集』（一九首）、『源氏物語』（一五首）、『後拾遺集』（一四首）、『新勅撰集』（二三首）、『新後拾遺集』・『歌枕名寄』（二一首）のとおり。

（七） 本抄の「い」の項目について、（六）と同じ条件で三首以上の収載歌人を整理すると、三百十四首に及ぶ。この数値は対象にした例歌（証歌）の五十五・六パーセントに相当する。なお、収載歌人の上位十五位を掲

げるならば、読人不知（五四首）、作者不記（三一首）、藤原良経・虚構作者（二四首）、藤原為家（一三首）、同定家（一二首）、同俊成（二一首）、柿本人麿（一〇首）、六条知家（九首）、紀貫之（八首）、伏見院（七首）、西行・慈円・藤原家隆（六首）、大江匡房・寂蓮・源実朝・順徳院（五首）のとおり。

（八）本抄の成立は、序文の執筆年時に「寛永十六年四月中浣」とあるので、それより以前と想定しうるが、刊行年時は、刊記から「明暦三年五月」と規定できるであろう。

（九）本抄の編纂目的は、序文の執筆者の林羅山によると、和歌の詠作者が実作をする際に、本抄に収録された豊富な歌語に触発されて、巧みな発想に基づく歌ごころを喚起して、優れた歌風の和歌を多く詠作するべく用意された歌語辞典の供給にあつた、と想定しうるであろう。

（十）本抄の編者・鱸重常については、その事蹟が現下、一切不詳であるが、林羅山の序文の記述から、重常は三河の国の「足助の庄、鵜瀬の里」の出身で、武蔵の国に出遊して、「刑官」（司法官・裁判官）の職に就いていた。生没年も現下、一切不詳であるが、憶測を逞しうすれば、天正十一年（一五八三）より以前に誕生し、明暦年間（一六五五～五八）ごろには生存していたらしい。要するに、林羅山と同様に、江戸時代前期を活躍の舞台にしていた人物であつたようだ。

（十一）本抄の近世類題集史における位相は、室町時代後期の成立たる宗碩編の『藻塩草』と同種の歌語辞典では、近世期の嚆矢の位置にあり、後続の『類葉倭調集』とを連繋する「架橋」の役割を担っている、と位置づけられようか。

（十二）本抄の連歌の視点からの諸々の検討は、今後の課題として残されている。